

現役介護職でもある阿部敦子氏による介護小説「もうひとつの世界」の連載がスタートします。ひとつの物語を2人の視点から描く本連載。第一話目は介護施設の利用者とケアスタッフの2人から見た世界です。

介護小説



もうひとつの世界

第一話 さつきも行ったでしょう

阿部敦子著

●著者プロフィール
介護福祉士、認知症ケア専門士、介護支援専門員。2013年に相模原市認知症介護指導者となる。著書に認知症介護小説「ひだまり」(株式会社ソクラ・テクノス刊・SIP版)があるほか、幻冬舎グループ主催の小説コンテストのエッセイコンテストで『要・恋暴度5』が大賞を受賞し、電子書籍化

その人の世界

トイレに座った私に届いた声は、少し太めの感じ。

「はい、おしっこしていいですよー」

私、じっとしている。背中が丸まって固まっちゃっているから床しか見え
ない。

「トイレに座ったから、おしっこしちゃっていいですよー」

斜め後ろから相手ももう一度言う。

わかってる。トイレに座っていることはわかっている。

「しちゃってもいいって……」

「そう、しちゃっていいですよー」

確かにおしっこをした感じがする。お腹の下のほうがじゅわりと重く
て、少しでも力を入れたらおしっこは出そう。

「でも……」

私の斜め後ろに人がいる。声からして男の人。

「出ない……」

私が言うと、「出ないですか?」と相手の声が一段上がる。責められてい
るように聞こえる。

「はい……」

普通は出せるものなのかしら。すぐ隣に人がいる所で、じゃあじゃあと。

「少しマッサージでもしてみますか」

そう言った相手が、私のお腹に手のひらを当ててくる。いやだ、そんな
ことしたら本当に出ちゃう。

「やめてください」

「おしっこが出ないと困るでしょう」

ちよろり、と微かな音がした。おしっこが出ちゃった。恥ずかしい。

「うーん、まあいいか。少し出たから」

ため息とともに呟いて、相手は私の前でトイレトペーパーを手に巻き
取った。それから私は相手に言われるまま、壁についている棒につかまっ
て立ち上がる。お股を拭かれて勝手にパンツとズボンが上がる。こんな
いやだ、と声にならない。手を引かれてトイレを出ると、窓際のソファに
座らされた。

座らされた。

「もうすぐごはんだから、ここに座っていてください」

背中の曲がった私の目線からお腹のあたりしか見えない相手はそう言い
残し、どこかにいなくなつた。

「もうすぐごはん……」

それどころじゃない感じ。その前にちゃんとおしっこしておかないと。私、立ち上がる。いつも座ってばかりいるからよろけそうだけれど、トイレくらいまでなら歩ける。

「あっ！ なんで！」

さっきの声に戻ってくる。

「今度はどこに行くの！」

上から肩を押されて膝が曲がる。どかっとソファにお尻が戻される。私、すぐに答える。

「おトイレに行きたいの」

「トイレ？ トイレならさっき行つたでしょう」

「おしっこがしたいの」

「だから、おしっこはさっきしたでしょう」

さっきのことはさっきのこと。私は今、おしっこがしたいの。おしっこが今にも出そうなの。

「もれちゃうの」

私が泣き出しそうな声を出すと、私からはお腹しか見えない相手の言葉が降ってくる。

「だーかーらー、どうせ行つても出ないから。さっき行つたばかりなんだから。出ないって自分で言つたでしょう」

また責められた。ばらばらと屋根を強くたたき雨みたいだ。私、おしっこがしたいだけなのに。

「おトイレ、行きますか？」

違う声が出た。今度は女の人の声。

「行きます」

答えた私の前に女の人はしゃがむと、目を合わせて微笑んだ。

「では行きましょう。ご案内しますよ」

女の人に手を取られて私は立ち上がった。歩き出すと背中越しに男の人の声が出た。

「さっき行つたばかりなんですよ？」

女の人は何も言わない。

トイレに座った私の斜め前にしゃがむと、女の人が言った。

「私、外に出ていきましょうか」

「ううん。ここにいちゃどうぞ。すぐに終わるから」

優しいお姉さんだもの、そばにいてくれたら安心しておしっこができる。私、うーん、とお腹に力を入れた。じよろろ、とおしっこが出る。長く長く、たくさん出る。

「はあ……」

からだじゅうの力が抜けていく。おもしろくないで済んだ。

「良かった……」

無意識に呟いて胸を撫で下ろす。

「すっきりしましたか？」

一歩近づいて、女の人が言った。

「はい、すごくすっきりしました。からだは軽くなりました」

「ああ、良かったです」

顔を見なかつたけれど、女の人の方が嬉しそうだった。

「それじゃあ行きましょうか。もうすぐお食事ですね」

「はい」

ゆつくりとトイレトペーパーを引き出して丸めると、私は自分でお股を拭いた。「よいしょ」とふんばって立ち上がり、パンツを上げる。後ろがうまく上がらないと、女の人が「お手伝いしましょうか」と引き上げてくれた。

「ありがとう」

私が言うのと、「こちらこそ」と女の人の方が弾んだ。

トイレでおしっこをしただけなのに、とってもいい気分。ごはんが楽しみ。今日は何だろう。

もうこれで何度目だろう。ハルさんのトイレに付き合うだけで一日が終わってしまうと言っても大げさではない。

「はい、おしっこしていいですよ」

言葉をかけるが、なかなか出ないことがほとんどだ。出ると言うからトイレ誘導しているのに。

「トイレに座ったから、おしっこしちゃうっていいですよ」

トイレに座っているということを伝えてみる。そのことを理解できていないから排尿に至っていない可能性がある。

「しちゃってもいいって……」

「そう、しちゃっていいですよ」

ハルさんの耳元に向かってはっきりと伝える。ハルさんは円背のせいで床しか見えないから、自分に言われていると気付いていないことがある。

「でも……」

ハルさんがか細く呟く。

「出ない……」

なんでだよ。さつき出るって言って立ち上がった。だからまたわざわざ来たんだ。まだ記録業務もぜんぜん終わっていないし、食事の誘導まであと一人をトイレに連れて行って、臥床している二人を起こしてこないといけないのに。もういい加減にしてほしい。ふらついてすぐに転ぶぐせにやたらと立ち上がる。この人のおかげで仕事は何もできない。

「出ないですか？」

「強い強く言ってしまう。」

「はい……」

はい、じゃねえよ。こうやっていつも出ないまま戻るから、また行きなくなるんだろ。ちゃんと出さないと、また来るはめになる。嫌がるだろうけど腹圧をかけるか。

「少しマッサージでもしてみますか」

後ろからハルさんの腹部に手のひらを当てる。ゆっくりと圧をかけなが

ら、円を描くように撫でる。

「やめてください」

「おしっこが出ないと困るでしょう」

ちよろり、と微かな音がした。こんなもんだろうか。もっと出てもいいように思うが、何しろ今は時間がない。

「うーん、まあいいか。少し出たから」

ため息まじりに呟いて、トイレトペーパーを手に巻き取る。「ここにつかまってください」と言って手すりを持たせると、ハルさんの陰部を拭いて紙パンツとズボンを上げる。手すりからハルさんの両手を離し、そのまま引いて歩いてもらう。

窓際のソファにハルさんを座らせ、壁の時計を見上げる。やばい。もうこんな時間だ。こうなったら記録業務は定時後に回すしかない。

「もうすぐごはんだから、ここに座っていてください」

ハルさんの頭の上からそう言って、排泄チェック表をつけるために走る。手を洗いたい、それよりも臥床している方を起こしてこない。ハルさん以外の方のトイレ誘導はもう諦めるしかない。

「あっ！ なんで！」

ハルさんが立ち上がっている。震える膝で、はじめの一步を出すところだ。握っていたボールペンをバインダーに叩きつけるように放り出し、ハルさんの元へ駆け寄る。

「今度はどこに行くの！」

思わずハルさんの両肩を上から押さえつけ、ソファに座らせる。一人歩いたら転ぶに決まっているのになんで立つんだよ。

「おトイレに行きたいの」

「トイレ？ トイレならさつき行ったでしょう」

「おしっこがしたいの」

「だから、おしっこはさつきしたでしょう」

もう本当にいい加減にしてくれ。この人のためにどれだけ他の人や仕事を犠牲にしている？ しかも小便が出るならまだいいが、ほとんど出ないんだ。

「もれちゃうの」

ハルさんが泣き出しそうな声を出した。冗談じゃない。腹圧かけても出ないのに、何がもれるっていうんだ。

「だーかーらー、どうせ行っても出ないから。さつき行ったばかりなんだから。出ないって自分で言ったでしょう」

もう我慢も限界だ。これで強く言わずにいられる人間がいたら教えてくれ。お願いだから定時で帰らせてくれ。

ハルさんの肩から手を離し、どうしようかと思ひあぐねる。今ここを離れたら、ハルさんはまた立ち上がる。

「トイレ、行きますか？」

ふいに現れてハルさんに言葉をかけたのは介護課長だった。フロアにいたなんて全く気付かなかった。あまりに必死だったから、まわりが見えていなかったんだ。

「行きます」

ハルさんの正面にしゃがんだ女性の介護課長と目を合わせ、ハルさんは答えた。ハルさんの言葉に介護課長は笑顔で応える。

「では行きましょう。ご案内しますよ」

介護課長がハルさんの手を取ると、ハルさんは立ち上がった。

「さつき行ったばかりなんですよ？」
思わず口を出すと、介護課長はこちらに目配せをした。ついてこい、ということだ。静かに後をついて行き、二人がトイレに入った後で細くドアを開けて中をうかがう。

トイレの便座にハルさんが座ると、介護課長はその斜め前にしゃがんだ。

「私、外に出ていますようか」

「ううん。ここにいてちょうだい。すぐに終わるから」
ハルさんはそう言って、もともと丸い背中を更に丸めた。少ししてから、

じよろろ、と排尿の音が聞こえる。勢いよく出ているその音は長く、なかなか途切れない。驚くほどの尿量だ。こんなにためていたのか。

「はあ……」

ため息とともに、力が入っていたハルさんの肩が下がる。

「良かった……」

ハルさんの眩きと同時に、それを聞いた自分もどこかでほっとしている。

一步離れていた介護課長がハルさんに寄って言った。

「すっきりしましたか？」

ハルさんはこっくりと頷くと、目尻を下げた。

「はい、すごくすっきりしました。からだが軽くなりました」

「ああ、良かったです」

笑顔になった介護課長が立ち上がった。

「それじゃあ行きましょうか。もうすぐお食事ですね」

「はい」

ハルさんはゆっくりとトイレレットペーパーを引き出して丸め、自分で股を拭いた。それから「よいしょ」と言って立ち上がり、パンツをゆっくりと上げ始める。後ろがうまく上がらない様子を見て、介護課長が「お手伝いしましょうか」と引き上げた。

「ありがとうございます」

ハルさんが言って、「こちらこそ」と介護課長が応えた。

フロアのソファに戻ったハルさんは、とても穏やかに微笑んでいた。

「やっぱりこのフロアは一人では難しいね。急いで検討するね。ごめんね」
洗った手を拭きながら近寄って来た介護課長が、申し訳なさそうに言った。

「いえ……」

言いたいことはたくさんあったはずなのに、不思議なほど霧散してしまった。ただ、定時で上がれないのがハルさんのせいでないことだけは、わかっていた。